

# 都市域のアートイベントによる地域特性の顕在化の可能性

—日独のアートイベントを事例として—

Potential for the Representation of Regional Characteristics through Art Events in Urban Areas

: A Case Study of Biennales in Japan and Germany

玉垣 唯

TAMAGAKI Yui

## 1. はじめに

### (1) 研究背景

近代以降、日本の都市域ではその固有性の消失と均質化が指摘されており、地域特有の風景が見いだしにくい。利便性、効率性、経済的合理性を追求し続けた結果として、駅前の商業施設群や、コンビニやレストランなどのチェーン店が建ち並ぶ繁華街の風景からは、地域の固有性を読み取る事は難しいが、人が住み続けてきた都市域においても地域特性<sup>注1</sup>は存在する。

一方、日本では地域活性化及び地域の新たな魅力を発現する取り組みの一つとして、美術館から日常生活の場まで地域全体を会場として使用するアートイベントが、既に多様な特性が顕在化している農村部や中山間地域を中心に全国的に展開している<sup>1</sup>。最近では、このようなイベントが都市域でも開催されるようになっており、今後さらにこの動きが活発化することが予想される。都市域のアートイベントが効果的に開催されることで、今まで見えづかった都市の固有性が顕在化し、多様な展示会場の提供による芸術の新たな展開も期待される<sup>2</sup>。

現在のアートイベント運営の工程は、作品展示会場の提供と、作品の制作・展示の大きく2工程に分けられる。日本の都市域におけるアートイベントの今後のあり方を検討するためには、日本と海外のアートイベントの事例から、主催者や各イベントの目的が反映される第1の工程、つまり会場選出に至る過程（実施過程）を把握し、比較する必要がある。

### (2) 研究目的・対象

本研究は、日本と他国の都市域で展開するアートイベントの実施過程及びそこでの地域特性の取り扱い方を比較し、地域特性の顕在化及び新たな作品展示会場の提供に資するアートイベントのあり方の考察を目的とした。研究対象は、2015年時点での認知度と実績を考え、日本の事例として横浜トリエンナ

レ、神戸ビエンナーレ、あいちトリエンナーレを取り上げた（表1）。また他国の事例として、ベネチアにおける運河のように特異な地域特性が顕著に表れているとは言いがたい、ドイツの首都で開催されているベルリンビエンナーレを取り上げた（図1）。

表1 初回開催年と開催数(2015年時点)

	横浜トリエンナーレ	神戸ビエンナーレ	あいちトリエンナーレ	ベルリンビエンナーレ
初回開催年(直近)	2001 (2014)	2007 (2015)	2010 (2013)	1998 (2014)
開催数	5回	5回	2回	8回



図1 第8回ベルリンビエンナーレ(2014年)の会場風景(筆者撮影)

### (3) 論文構成及び研究方法

第1章で研究の背景と目的を示し、第2章で研究対象である4事例のイベント開催背景と、各回の実施概要をみた。第3章では実施過程を4段階（会場選定、テーマ設定、アーティスト・作品選出、展示場所の選定）に分け、各段階における主体及び地域特性の取り扱い方を把握した。第4章では、各事例の開催会場及びその分布に見られる特徴を整理し、会場・空間（エリア）利用の特徴を把握した。第5章では、第4章までの検証により地域特性との関係が考えられたベルリンビエンナーレを対象に、テーマ設定・開催会場選定の背景とその関係性を整理した。これらの結果から、第6章で都市域におけるアートイベントの地域特性顕在化及び新たな作品展示会場の提供の可能性について検討した。各アートイベントの情報は、報告書（日本のみ）、プレス資料、カタログ、公式ウェブサイト等の精査と、当該イベントの運営主体へのヒアリング、現地調査から得た。

## 2. 各アートイベントの開催背景

横浜トリエンナーレは、日本国内での国際美術展開催の要望が国内外で出たことを受け、1997年に外務省が定期開催の方針を発表し、開催が決まった。2004年には、同市が策定した創造都市施策のもと、リーディング・プロジェクトとして位置づけられた。神戸ビエンナーレは、2004年に神戸市が発表した神戸らしさを活かし魅力あふれる文化のまちを実現することを謳った「神戸文化創生都市宣言」のもと、2005年に開催が決定した。あいちトリエンナーレは、愛知県文化芸術課が2006年に策定した「新しい政策の指針」(総合計画)の中で、愛知芸術文化センターを拠点とした国際アートイベントの開催が提示され、開催が決定した。日本の他2事例とは異なり、県が主催している。ベルリンビエンナーレは、ベネチアビエンナーレに影響を受けたクラウス・ビーゼンバッハ(Klaus Biesenbach)によって1996年に運営組織が立ち上げられ、開催に至った。日本の3事例は行政によって提言された施策や方針に基づいて、ベルリンビエンナーレは一個人によって開催に至ったことがわかる。

## 3. 実施過程からみる各アートイベントの特徴

### (1) 主催団体と開催目的

各アートイベントにおける主催団体と開催目的を整理した。

**横浜トリエンナーレ:** 主催には民間団体も含まれるが、横浜市の文化政策に基づいており、その内容や方向性には市の創造都市施策が大きく関わっている。また、初回から同市と公的機関である国際交流基金が主体となり、行政主導で開催されている。開催目的に「賑わいづくりと経済活性化」等が謳われている。  
**神戸ビエンナーレ:** 神戸市と同市が組織した委員会が主催団体となっており、行政主導で開催されている。開催目的に「文化を活用した創造的な都市づくり」「まちの賑わいづくりや活性化」等が謳われ、その内容には同市の文化政策が大きく反映している。

**あいちトリエンナーレ:** 愛知県が設立した委員会が主催団体となっており、行政の文化政策に沿ってイベントの方向性が決められている。開催目的に「文化芸術活動の活性化による地域の魅力の向上」等が謳われている。

**ベルリンビエンナーレ:** 第4回(2006年)に主催団体の変更があったが、いずれも前出の企画者クラウス・ビーゼンバッハにより組織されている。開催目

的も同氏により設定され、その内容は現代芸術の創造活動を目的としたものである。

### (2) 実施過程における主体と地域特性の取り扱い

#### (i) 選定・設定主体

イベント実施過程の各段階における中心的な活動主体を把握した(表2)。

表2 各段階における主体

段階	横浜トリエンナーレ	神戸ビエンナーレ	あいちトリエンナーレ	ベルリンビエンナーレ
会場選定		(●含)	(●含)	●
テーマ設定	●	(●含)	●	●
アーティスト・作品選出	○	○	○	○
展示場所の選定	○	○	○	○

- 総合キュレーター
- 総合キュレーターとキュレーター
- 主催団体(組織・実行委員会)

横浜トリエンナーレでは、会場選定に主催団体が関与し、総合キュレーター<sup>注2</sup>はテーマ設定から展示場所選定のみに携わっている。神戸ビエンナーレでは、会場選定とテーマ設定において総合キュレーターを含む主催団体が中心となって選定・設定している。アーティスト・作品選出と展示場所選定に関しては、総合キュレーターとキュレーターのみが関わっている。あいちトリエンナーレは、会場選定において総合キュレーターを含む主催団体が携わっているが、テーマ設定から展示場所選定においては総合キュレーター(又はキュレーター)のみが関わっている。一方、ベルリンビエンナーレでは、会場選定から作品の展示場所選定に至るすべての段階において、一貫して総合キュレーターが関わっている。

#### (ii) 地域特性の取り扱い

次に、各段階において、主体による地域特性の新たな読み解き作業の有無を把握した(表3)。日本の3事例はほぼ同じ結果であった。

表3 各段階の主体による地域特性の読み解き

段階	横浜トリエンナーレ	神戸ビエンナーレ	あいちトリエンナーレ	ベルリンビエンナーレ
会場選定	-	-	△	○
テーマ設定	-	-	-	○
アーティスト・作品選出	-	-	-	○
展示場所の選定	-	-	-	○

- 新たな地域特性の読み解き
- △ 一部会場で新たな地域特性の読み解き

### 【日本の3事例】

**会場選定:** 行政政策に基づき、今後のまちづくりにおいて核となりうる場所や観光地として既知の場所を会場に設定しており、会場選定のための現地調査は

確認されなかった。つまり、全ての会場やエリアにおいてそれぞれの歴史や特徴を見ているのではなく、全体における位置づけや既知の歴史・特性が俯瞰的に考慮されているにとどまっているといえる。これは、選定過程において新たな読み解きが充分行われず、地域特性が限定的に考慮されて使用されているといえる。あいちトリエンナーレでは、行政政策とは関係なく総合キュレーターが一部の会場を推薦しており、その地域特性を踏まえていることが伺える。

**テーマ設定:**総合キュレーターが、開催会場の特性を読み解く作業である現地調査を行なった上でテーマ設定をしたといった記述は報告書等の資料から確認されなかった。また、テーマとその趣旨に開催地と直接的な関係性がみられないものがほとんどであり、地域特性が充分踏まえられているとは言いがたい。神戸ビエンナーレに関しては趣旨に「神戸」という地名を取り扱っていたが、それは神戸全体の観光地として既知の特徴を踏襲しただけのものであった。

**アーティスト・作品選出:**共通してテーマに沿ったものが選ばれている。しかし、テーマ設定の段階で地域特性の読み解き作業が行われていないと考えられるため、この段階においても地域特性が充分反映された上で選定されていないと判断した。

**展示場所の選定:**あいちトリエンナーレの一部会場を除き、会場選定において地域特性を読み解く作業が行われていないと考えられ、また作品選出において展示場所の特性を踏まえた作業がなされていないことから、展示場所の選定においても地域特性の読み解き作業が充分行われていないと考えた。

#### 【ベルリンビエンナーレ】

**会場選定とテーマ設定:**総合キュレーター自らが現地調査を行なった上で、会場とテーマが同時に設定されていた。テーマそのものは、その趣旨も含めて開催地とは直接的な関係がみられないものもある。しかし、すべての回における会場とテーマは、総合キュレーターによる現地調査から着想を得て設定されたものであり、地域特性を踏まえた上での設定がなされているといえる。

**アーティスト・作品選出:**テーマに即したものが選ばれている。地域特性の読み解きが行われた上で会場及びテーマが設定されており、一貫して総合キュレーターが実施過程に関わっていることから、開催会場の特性に合致するかどうかについても考慮されていると考えられる。そのため、この段階においても地域特性を読み解く作業が行われていると判断した。

**展示場所の選定:**空間と作品の関係性から展示場所が設定されている。会場選出からアーティスト・作品選出において地域特性を読み解く作業が行われ、実施過程において一貫して総合キュレーターが主体として関わることから、地域特性を踏まえている。

#### (3)小括

日本における3事例は、行政主導で開催目的には文化政策の一環としての地域活性化が反映されている。しかし、イベントによって差異はあるものの、会場選定から作品の展示場所選出の過程において主体が一貫しておらず、地域特性を読み解く作業である現地調査が設定・選定作業において行われていなかった。あいちトリエンナーレの会場選定の段階では、一部会場で地域特性の読み解きが行われた可能性がある。一方ベルリンビエンナーレは、民間主導で開催目的に現代芸術の創造活動が謳われている。また実施過程の全段階において総合キュレーターが一貫して関わっており、会場選定とテーマ設定において地域特性を読み解く現地調査が実施されていた。主体が実施過程に一貫して関わることで、アーティスト・作品選出と展示場所選定にも地域特性を読み解く作業が反映されている可能性があるといえる。

### 4. 開催会場と分布状況の傾向

#### (1)開催会場の特徴

各アートイベントにおけるこれまでに使用された開催会場<sup>注3</sup>を整理した(図2)。

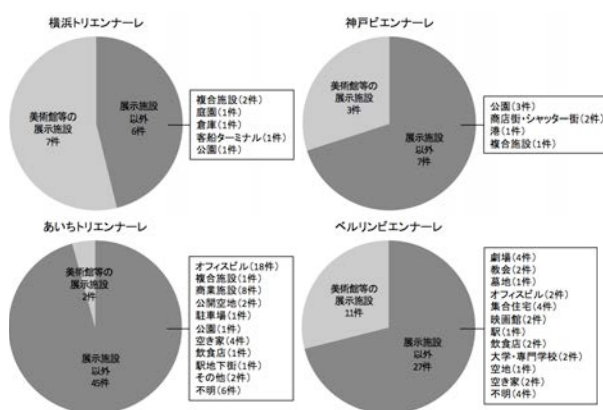


図2 各アートイベントのこれまでの開催会場

**横浜トリエンナーレ:**第3回(2008年)まで主催団体の意図により、通常作品が展示されず市民の生活圏にある施設(複合施設や観光地等)を使用していた。しかし、第4回(2011年)に初めて美術館が使用されると、作品展示を目的とした施設や過去の開催で使用実績のある会場が主な会場となっていた。



**神戸ビエンナーレ**：港湾地帯等の観光地として既知の施設や場所が使用されていた。開催数を重ねるごとに使用される施設や開催エリアの拡大はみられたが、基本的に作品展示に適した同じ会場（公園や美術館等）を継続して使用している。一方、住民の生活圏にある商店街やシャッター街の一部使用も見受けられた。しかし、これらの会場に展示される作品数は全体数の5パーセント程度<sup>注4</sup>であり展示場所の数も少ないことから、同会場を十分に活かしたイベントが行われているとは言いがたい。

**あいちトリエンナーレ**：開催会場数が多く、使用された会場が美術館や展示施設の他に、オフィスビルや商業施設、空き家など多様である。同トリエンナーレにおいても神戸の事例同様にシャッター街が会場として使用されているが、集積する空きビルなどを多く使用しシャッター街全体を会場としている。この他に、ショッピングモールなどの住民の生活圏にあり作品展示を目的としない施設が使用されていた。

**ベルリンビエンナーレ**：展示施設や劇場などの専門文化施設だけではなく、集合住宅や学校、教会や墓地などの多様な施設が使用されている。また、2会場以外すべての回を通して使用された会場が異なっていた。第4回以降は、集合住宅等の私的空間も使用され始め、開催会場の用途も多様に展開している。

### (2) 会場の分布状況からみる開催エリアの傾向

各アートイベントにおけるこれまでの会場分布と使用されている空間（エリア）について整理した<sup>注5</sup>。

**横浜トリエンナーレ**：これまでの会場の分布をみると、観光地として既知の港湾地帯に会場が集中しており、横浜市の中でも一部のエリアしか使用されていないことがわかる（図3）。



図3 横浜トリエンナーレのこれまでの会場の分布

**神戸ビエンナーレ**：観光地として既知の港湾地帯に会場が集中している。一部、港湾地帯から離れたエリ

アの美術館が使用されていた（図4）。

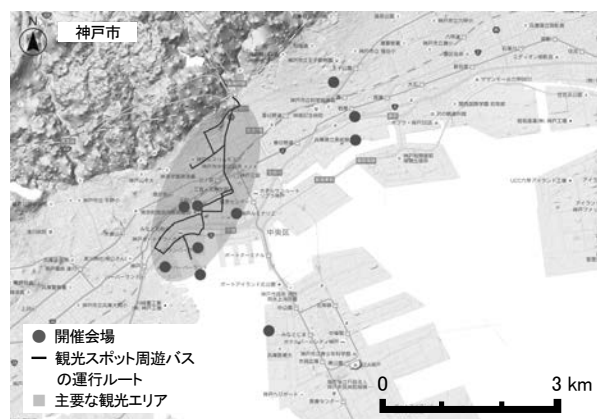


図4 神戸ビエンナーレのこれまでの会場の分布

**あいちトリエンナーレ**：第1回は名古屋市市内のみで行われており、会場のあるエリアが集中している。第2回では岡崎市にも開催エリアが拡大されているが、両市ともに会場のあるエリアは集中している（図5）。

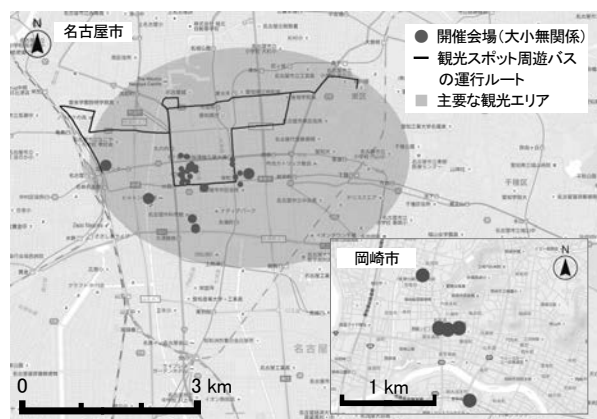


図5 あいちトリエンナーレのこれまでの会場の分布

**ベルリンビエンナーレ**：市内の多様な地域に広く分布していることがわかる。また、回によって異なるエリアが使用されている（図6）。

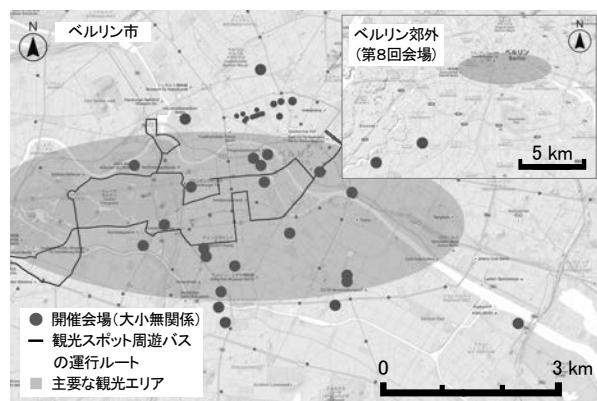


図6 ベルリンビエンナーレのこれまでの会場の分布

### (3) 小活

横浜トリエンナーレと神戸ビエンナーレでは、回

によって住民の生活圏にある施設や場所が使用されているが、主に美術館やイベント施設、あるいは観光地として既知の施設などの、作品展示に適した公共施設や場所が使用されていた。開催エリアは、回によって一部他エリアへの展開もみられたが、特定の地域に集中していた。これは、開催目的である賑わいづくりや都市づくり、都市の魅力の創造などに対応しているとは言いがたい。あいちトリエンナーレでは多様な会場が使用されているが、そのエリアは集中していた。会場の多様性においては、開催地の多様な側面を読み解き新たな展示会場の提供という点において、注目すべき点であると考えられる。

一方、ベルリンビエンナーレでは開催会場が多様であり、会場分布も市内の多様な地域に広範囲に展開していることがわかった。多様な会場やエリアの設定は、新たな特性を持った展示会場を提供するとともに、来場者にベルリンの多様な地域特性の体験を提供しているといえる。

## 5. ベルリンビエンナーレにおけるテーマと会場の関係

### (1) テーマ設定の背景

ベルリンビエンナーレにおけるテーマ設定は、前述した通りイベントの実施過程で一貫して関わる総合キュレーターの現地調査のもと設定されている。ここでは、その設定背景においてどのように開催地の地域特性が考慮されているかを把握した。すべての回において、総合キュレーターはそれぞれ異なるベルリンの側面をテーマ設定において考慮していることが伺えた。テーマと開催会場の関係をみていくにあたって、文献においてその関係性が明文化されている第3回、第4回、第8回を示す。第3回のテーマは、1980年代から20年間のベルリンの歴史的な変化に着目し、芸術を用いてその特異性を引き出すことであった。第4回のテーマは、当時廃墟であった開催会場から過去の住人達の面影を見だし人生にまつわるものであった。第8回のテーマは、ベルリンの都市開発の様子に着目し、時代と共に変遷する都市の構造について中心地と郊外から捉えることを意図し、ベルリンの大きな歴史と個人の人生が交差する地点を探求することであった。

### (2) 開催会場選定の背景

前述した3回における開催会場選定の背景をみる。第3回では、テーマに基づいてベルリンの都市の変化が顕著にみられ、且つ映像等の多様なメディアを使用できるエリアに開催会場が置かれた(図7)。第

4回は、テーマ設定に至る契機となった会場が、過去にユダヤ人居住区であったエリアにあり、且つそのエリアが現在も市民の生活空間であることから、会場をそのエリアに集積させた(図8)。第8回では、テーマをもとにベルリンの中心地にあるギャラリー(拠点会場)(図9)と、郊外のエリアに二つの会場が設置された(図10)。



図7 第3回の一部会場



図8 第4回の会場が集積する通り



図9 ギャラリー(拠点会場)周辺



図10 郊外にある一部会場周辺

\*全ての写真筆者撮影

### (3) テーマと開催会場の関係による効果

前述した3回は、いずれもテーマと会場に関係があり、さらに多様性があることもわかった。これによって、以下に示す効果が考えられる。第3回では、ギャラリー(拠点会場)と映画館、美術館の3会場が使用されたが、テーマに合致した選出作品を通して都市の変化を認識させ、会場間の回遊性を利用して実際の都市の変化を見ることを可能にしたと考えられる。第4回は、住宅等の私的空間が使用され、テーマに即した視点からこれまでとは異なる見方で開催会場とエリアを捉え直す機会が生じたと思われる。第8回は、ギャラリーと博物館が使用され、使用するエリアの選び方によってこれまで注目されてこなかった地域に目が向けられる可能性が高まったと考えられる。

### (4) 小括

ベルリンビエンナーレにおいて、テーマと開催会場の関係性が明文化されている回では、総合キュレーターが読み取った地域特性に目が向けられる可能性が高まると考えられる。異なる総合キュレーターによって読み解かれた地域特性は、それぞれ異なることが考えられ、それによって多様な会場やエリアが選定されたと考えられる。また、同じ開催会場やエリアであっても、異なる視点で見いだされた、地

域の異なる側面が注目されるようになると思われる。このことは、新たな魅力や価値を捉え直す機会にもなり、結果、改めて様々な地域特性の顕在化を促す試みと考えられる。テーマと会場に関係性をもたせるだけでも地域特性の顕在化は可能であり、来場者は会場を訪れることで地域特性を体験しうることが示唆される。

## 6. まとめ

本研究では、都市域におけるアートイベントの開催による地域特性の顕在化及び新たな作品展示会場の提供について、より効果の期待できる実施過程を日本とベルリンの事例から検証した。

日本とベルリンの事例で最も顕著だった相違点は、主催における行政の関わり方であった。日本の事例は行政主導で開催され、その目的には文化政策の一環として、地域の活性化や新たなまちづくりを謳っている。しかし、実施過程では地域特性の読み解きにつながる現地調査等の作業が行われておらず、開催会場も一部を除いて観光地等の既に賑わいがあるエリアが選ばれており、開催地の新たな魅力や新たな展示会場の提供に結びついているとは言い難い。また、実施過程において各段階の主体が一貫しておらず、アートイベントにおける作品展示を通して場所の特徴が注目される効果<sup>3</sup>を期待できず、行政が意図するまちづくりに充分対応しているとは言いがたい。一方ベルリンの事例は、民間主導で開催され、目的も芸術的創造に据えられ、開催地の特徴と変化を捉える作業が実施過程においてなされていた。また、実施過程は一貫して総合キュレーターが主体となっており、これによって新たな展示会場が提供されるとともに、来場者が地域の新たな地域特性に気づく可能性が高まっている事が推察できた。

日本の事例では、開催目的に芸術活動を通じたまちの活性化をあげ、開催地の新たな魅力創出が望まれているにも関わらず、地域特性の読み解きを充分に行うための具体的な対策がなされていなかった。一方、あくまでも芸術活動を目的として開催されているベルリンの事例では、会場選出に先立って現地調査を行うなど、地域の特徴を芸術によって顕在化させるという、芸術的創造が備えている効果を充分に発揮させ得る過程となっており、日本のアートイベントに有効に応用することができると考えられる。こうしたベルリンの取り組みは、そもそも芸術が文化として定着していることによるところも大き

い。日本においても、新たな開催会場を展開させることで芸術が文化として定着し、さらに新たな地域特性を顕在化していく可能性も考えられる。

日本の都市域におけるアートイベントが、街の新たな魅力や資源の発見を目的として開催されるのであれば、会場の選定を行政主導で行うのには限界があると考えられる。イベントのテーマや展示の意図に沿ってより効果的な演出が行えるように、テーマ設定やアーティスト・作品選出を行う総合キュレーターに、会場の選定から一貫して委ねてみることも有効であると思われる。総合キュレーターが開催地に抱く独自のイメージをより柔軟に企画に反映させ、新たな地域特性の発見、並びに真のまちづくりにつながる可能性が期待できるからである。

## 参考文献

- 1) 吉本光宏：「トリエンナーレの時代-国際芸術祭は何を問いかけているのか」、ニッセイ基礎研究所、2014年
- 2) 今道友信：「美について」、講談社現代新書、1973年
- 3) 上段貴浩/脇田祥尚：「アートイベントによって顕在化する歴史的市街地の地域資源-『からほりまちアート』を事例として-」、日本建築学会計画系論文集(第75巻 第658号)、pp.2873-2880、2010年

## 注

注1) 本研究では、「地域特性」を建物、人、商業、食、文化、地理(地形)、気候、歴史などの、地域の特徴として考え得るすべての要素の総体として、地域があらゆる固有性と定義した。

注2) 主体を把握するにあたり、各アートイベントによってそれぞれ役割の呼び方が異なったため、本研究では便宜的にそれぞれの役職名を統一した。「総合キュレーター」とは、アートイベントにおいて学芸業務全般を統括する人物である。「キュレーター」とは、総合キュレーターの指示の下学芸業務に携わる人物とした。

注3) 本研究における各アートイベントの開催会場は、報告書(日本のみ)、カタログ、公式ウェブサイトに記載され、且つ展示形態や有料・無料を問わずアートイベントの開催期間中において恒常的に使用されたすべての会場を対象とした。

注4) 作品数の割合は、不明なものを除き、カタログに明記された開催会場におけるすべての展示作品件数から算出した。

注5) 地図を作成するにあたり、主要な観光エリアは、各公式観光ウェブサイトに記載されている地図と観光スポット周遊バスの運行ルートを基に、観光スポットが特に多く集積している場所を取り上げた。それぞれの観光スポット周遊バスの運行ルートは、各運営会社のウェブサイトを参照した。

横浜市交通局

<<http://www.yokohama-bus.jp/akaikutsu/>>、2016.1.31 参照

神戸交通振興株式会社

<<http://www.kctp.co.jp/outline/car/cityloop/33/>>、2016.1.31 参照

名古屋市交通局

<<http://www.kotsu.city.nagoya.jp/bus/meigle.html>>、2016.1.31 参照

Gullivers Sightseeing

<<http://gullivers-sightseeing.de/route/>>、2016.1.31 参照